

## 諏訪・大宮流の鷹書

— 廣田宗綱筆『鷹書才覚巻抄出』全文翻刻 —

## はじめに

鷹狩りににおける「諏訪流」とは、信濃国諏訪大社の贄鷹の神事に端を発し、中世期～近世期において我が国で最も隆盛した鷹術の伝派である。同派は大別すると信濃国在地の禰津一族の流派と京都に進出した同族の諏訪円忠の子孫が携えた流派とがあり、前者は主に近世になってから徳川幕府の庇護を受けて栄え、後者は南北朝期の足利幕府に仕えることによって隆盛した。このうち、信濃国在地の諏訪流の方は、一四世紀頃の禰津一族の鷹飼・大宮新藏人宗光（禰津貞直の四代の子孫）が創始したという<sup>①</sup>「大宮流」が本流とされる。この大宮新藏人宗光は、国立公文書館内閣文庫蔵『鷹啓蒙集』第七冊奥書（函号一五四・三一〇）によると、

大宮新藏人鷹学のをしへあまねく古きをたつね、あたらしきをきはめて理をつくし、法をそなへ侍れは、我智のつたなきを以、あらためた、すへきにはあらねと蚤歳サウサイより諸流ケミを閲して力を此道にゆたねぬるあまりにて、しばらくしけきをかりたらざるを、きのひ、みつから心に得手になれし事をかきあつめて、けいもうしうとなづけ侍る。すこぶる童子のこの理にくらきものをひらき、みちひく便にもあらんかし。

と見え、彼の放鷹の教を集約した書物が『啓蒙集』と称されたという。この『啓蒙集』なるテキストには異本が数多くあり、たとえば、宮内庁書陵部には抄本を含めて一六本が現存し、国立公文書館内閣文庫に

## 二本松 泰子

も同じく抄本を入れて三本が現存している。<sup>②</sup>内容は伝本によってかなり異同があるため、いずれが本来の姿を留めた古態本なのか判断することは極めて難しい。なお、『啓蒙集』を称するテキスト群のうち、管見において最も古い写本年紀を持つものは、「承応三年（一六五四）正月」に「山本藤右衛門」（山本盛近）によって書写されたという宮内庁書陵部蔵『啓蒙集』（函号一六三・九〇二）である。<sup>③</sup>

ところで、その大宮流の流れを汲む鷹飼に禰津松鶴軒（信直・政直）という人物がいる。『信州滋野氏三家系図』<sup>④</sup>によると大宮新藏人宗光すなわち禰津宗光から一八代目に当たり（栗原柳庵著の『柳庵雜筆』第二巻<sup>⑤</sup>によると宗光より一五代裔とされる）、戦国時代末期～江戸時代初期にかけて活躍した武将である。彼が徳川家康に重用された所縁で、近世期を通じて徳川幕府の職制としての鷹飼は代々諏訪・大宮流が継承することになった。いわば諏訪・大宮流の中興の祖ともいえるこの禰津松鶴軒は、多数の鷹書類を著作・書写しており、戦前の宮内省式部職が編纂した『放鷹』『本邦鷹書解題』<sup>⑥</sup>によると、当時の宮内省図書寮には天正一六年（一五九二）の年紀と「禰津松鶴軒常安」の名前が見える奥書を持つ松岡本『才覚之巻』が所蔵されていたという。この松岡本『才覚之巻』が現存すれば、近世前期以降の書写本しか存在していない『啓蒙集』よりも古いことになり、諏訪・大宮流の中世におけるテキストとして注目に値する。

しかしながら、宮内庁書陵部で現在所蔵されている『才覚之巻』（函号

一六三・九二八)には如上のような記述は見えず、そもそも奥書自体が記載されていない。同書の内容としては、宮内庁書陵部蔵『啓蒙集』(函号一六三・九〇二)と一部重複することから、大宮流の流れを汲むテキストであることは相違なく、『放鷹』が紹介する欄津松鶴軒所縁の松岡本『才覚之巻』と極めて近い系統の伝本であることが予想される。が、先にも述べたように同書には奥書が無く、書写年代等の詳細について確かめるすべは無い。ただ、少なくとも受け入れ印に「昭和3年12月伯爵松平直亮寄贈」と見えることより、出雲松江藩最後の藩主である松平定安の息子・松平直亮の寄贈本であることが確認され、同書が松岡辰方の蔵書である松岡本『才覚之巻』と別物であることは断定できる。

ところが、今回、奥書に天正一二年(一五八四)の書写年紀が見える廣田宗綱筆『鷹書才覚卷抄出』が新たに発見された。その本文は宮内庁書陵部蔵『才覚之巻』とほぼ一致しており、同系統の伝本であることが認められる。ということは、同書もまた諏訪・大宮流のテキストと判じられ、しかも松岡本『才覚之巻』よりも古い書写年紀を持つことから、管見において諏訪・大宮流の流れを汲む最古の鷹書ということになる<sup>⑧</sup>。

そこで、本稿では廣田宗綱筆『鷹書才覚卷抄出』の全文翻刻を掲出する。いずれ『啓蒙集』本文の考察と併せて諏訪・大宮流の鷹書類を解明する布石として、まずはその本文を紹介したいと思う。

## 注

- ① 『柳庵雜筆』第二卷(『日本隨筆大成 第三期 3』所収、日本隨筆大成編輯部編、吉川弘文館、一九七六年一二月)などによる。
- ② 拙著『中世鷹書の文化伝承』第二編第三章「諏訪流の鷹術伝承(二)」(三弥井書店、二〇一二年二月)。
- ③ 拙著『中世鷹書の文化伝承』「資料紹介 宮内庁書陵部蔵『啓蒙集』」。
- ④ 『続群書類従 第七輯上』所収。

- ⑤ 前掲注(1)に同じ。
- ⑥ 『放鷹』(宮内省式部職編、一九三二年一二月、吉川弘文館、二〇一〇年六月新装復刻)。
- ⑦ 拙著『中世鷹書の文化伝承』第二編第一章「諏訪流のテキストと四仏信仰」など。
- ⑧ 『才覚之巻』を称する鷹書としては他に、永青文庫所蔵の『鷹書才覚之卷抄出』一冊があるが未見。

## 【凡例】

- 一 翻刻は廣田宗綱筆『鷹書才覚卷抄出』によった。
- 一 翻刻に關しては、できるかぎり原文に忠実になるようにつとめ、改行は原本に従った。
- 一 明らかな誤字や脱字などと思われる箇所はそのまま翻刻し、傍らに(ママ)をつけた。
- 一 改訂は「をもつて示し、(二オ)のように丁数ならびに表裏を示した。字体は底本の表記を重んじて旧字体の場合はほぼそのまま翻刻した。
- 一 花押は(花押)とし、その形態は示さなかった。

## 【書誌】

- 所 蔵 架蔵本。
- 卷 数 一卷。
- 丁 数 二二丁。(一九丁裏白紙)
- 行 数 半葉六行無罫、漢字平仮名交じり文。
- 外 題 無し。
- 内 題 卷首題「鷹書才覚卷抄出」(二丁表)。
- 寸法等 縦23.5糎×横16糎。
- 蔵書印等 無し。

奥 書 二二丁裏に「天正十二年<sup>甲申</sup>六月吉日廣田伊賀守藤原朝臣宗綱  
(花押)／同甚六郎殿」。

# 【本文】

## 鷹書才覚卷抄出

一 たかをつかひはしむる事は人けんの  
わさにあらず鷹と申は日本國<sup>にほんこく</sup>  
そのうへてんかに鳥共みちく<sup>しやう</sup>て衆<sup>しゆ</sup>  
生のかうさくをくらひうしなひける  
ほとにてんかの人間はや残<sup>のこり</sup>すくなに」(一オ)  
なりけるところに毘沙門大鷹不動は  
せう鷹普賢觀音此四仏<sup>ふけんくわんおんしよふつ</sup>もろく  
のたかとけんせられ彼<sup>かの</sup>とり共をうし  
なひ給ふによりせけんのかうさくうせ  
さるあひた人間いまたはんしやうすさる  
あひた普賢<sup>ふけん</sup>は上の宮觀音<sup>みやくわんおん</sup>は下のみや」(二ウ)  
とて諏訪<sup>すわしやうけ</sup>上下これ也

一 鷹をつかひはしむるはくさひ國に  
わう一人ましますかまかきのもとに  
鷹と云鳥奉れり是しらふの大  
たかなり彼たかをとりてくれない  
のあけの糸にて鈴をさし大くろの」(二オ)  
鷹たぬきにてすへさせけんせん山と  
いふ山に大せんたうと云谷にて彼鷹  
をつかはせ給ひて誠<sup>まことじ</sup>にゑひ花にほこ  
りあらくおほしめし給ふところにたか

ははをひろけてよりおちてしなんとす  
國わうふひんにおほしめしこれか此」(二ウ)  
やまふしつたるものやあるとせんしあり  
しかはおりふしふ人と申もの生<sup>むまれ</sup>  
所<sup>ところ</sup>もしらす出きたつてみんと申彼  
ふ人申様かのたかのやまひをはまん  
ひやうちけと申也國わうのせんしには  
さらは此鷹の病<sup>やまひ</sup>をなをしてまいらせ」(三オ)  
よとのせんしなりふ人申様なをして  
申さんとして錦<sup>にしき</sup>の袋よりくすりを取  
いたしみんなはかりくれ上にはそき  
ければ鷹もとのことくなをりけり  
御門ゑひらんましく<sup>て</sup>彼藥のほんせつ  
とてもみつからにあかすへしとのせんし」(三ウ)  
なりふ人申やうむかしは長生殿<sup>ちやうせいだん</sup>のうちに  
してせんしをかへすためしあればいか  
てくすりのほんせつを申へしとて彼  
くすりををしへ申さす國わう仰<sup>おほせ</sup>ける  
やうはさあらはなんちかためにはきさい  
國をえさすへしとありしかはふ人」(四オ)  
こたへて申様ちやうろくを被下<sup>ひくだ</sup>さす共  
せんしならは申へしむかしは長生殿<sup>ちやうせいだん</sup>の  
内にしてせんしを七度かへす中ころ  
かひら城<sup>じやう</sup>の内にしてせんしを五度  
返す今のふ人は國わうおほせ<sup>(ママ)</sup>のしたかい  
て彼くすりををしへ申也とてあかし申」(四ウ)

けり彼薬は大海たかいのうろくすにさるあはひと申あわひをかけほしにして山のうさきの角し、ゑにつゝみてかふへし昔むかし

長生殿のうちにしては鷹たかのふしの

くすりと申しんせんのうちにてはあかた

薬と申今はむそうかんと申鷹を」(五オ)

このまん輩はうにをいては彼くすりをつふ

さにしるへしまんひやうちけの薬には

このうへはあるへからす能々ひすへしく

諏訪すわと申普賢ふけん觀音くわんおん不動毘沙門鷹

となつて鳥共をたやし人間をたすけ

給ふ衆生しゆじやうにる中山人のすかたとなり」(五ウ)

草薙くさかりかまをこしにさし信濃しなのの國に

帰り給ひて諏訪すわ上下とあらはれ給ふ

かみの宮みやは普賢ふけん下のみやは觀音くわんおんにて

おはしますなり

ゑふくろはゑなふくろ也然間ゑな袋ふくろと書也

又ゑふくろ共書也又鳥のつふ子をもひ」(六オ)

ようする也又ふせ衣きぬをもゑな袋と

いふなり

鷹のまかた國よりつたはる事そう

よう元年八月三日に大國へつたはり候日

本へわたる事はにとくてんわうの八十七

年をたもち給ふ四十六年と申とき鷹」(六ウ)

に彼文書を相そへて日本へわたさるれ

とも彼文書をよみひらく人もなし

其比大わう鷹かひかねみつといふ者

日ほんへわたし彼鷹をかはせられて

あひしおほしめし候ところに彼かねみつ

鷹をつかひて御門みかどの御目みめにかけさて」(七オ)

其後しきりにいとまを申けり御門お

しみ給ひてとゝめ給へともたゝかへ

らんと申ある公家被申様は人をとゝむる

には女にしくはなしとありければ御門

けにもと思食美人おほしめしびじんせん人か中にすく

れたるこちくと云女をくたさるゝ彼」(七ウ)

女房むすめにつゐてから人かへる事をわすれ

けり年月をゝくるほとにほとなくむす

め一人もうくる彼むすめ十五になり

しときせいらひのきやうをかねみつ

かむこになし十八の秘事ひし卅六の口傳くでん

をしへけりせいらひのきやうの方より」(八オ)

から人のかたへ種々しゆくのちやうろくををく

らるゝから人の方より返報へんほうとおほし

くてかりしやうそくの鷹の道具相あいそへ

てをくるとてかくなん

小ちくてふ事をかたらはふゑたけの

ひとよのふしを人にかたるな」(八ウ)

彼こちくかむすめのなをはよねみつと

申彼よねみつ清水みよみつふつけいのとき

あるものたかをひとつもちけるか惣そうして

鳥をとる事なし鷹主たかぬし五条ごてうのはしの

もとにはこをゆひて彼たかをつなき上  
下の人のひはんをきく彼よねみつ申様」(九才)  
彼鷹の鳥をとらぬも道理也は、は

たかなれともち、はみさこにあるあひた  
うほをとらては鳥を取へからすと申

そのせうこには鷹はほこよりとはひおつる  
か此たかはみさこはをつかふほとにみさこ

の子なると見申也水をあひせて御らん」(九ウ)  
せよぬれへからすと申水をあひせて

みるにあんのことくぬれすさて彼たかを  
いかやうにと申よねみつこたへて申様

さらは河をそにとつきてもちたる犬  
を御たつねにて池へ入こいをとらせられ候

へと申一しゆかくなん」(一〇才)  
このうらにみさこにとつきたかあらは

をその子はらむいぬをたつねよ  
さてをその子はらむいぬはいかやうなるそ

ととひければよねみつこたへて申様  
をその子の犬は四まなこといふさらはとて

四まなこのいぬをたつねてしんせんゑん」(一〇ウ)  
と云池へ入てこひをさかさせてかの

鷹を合て見れはさういなくこいを  
とるなり

はし鷹のますかきのはをとふ時は  
なみまのこひもあらはれにけり

其比鷹たかなきあひたかに口ゑなし」(一一才)

一  
こひにくちゑありとは彼ひみつありかの  
女房はせいらひか家ぬしなり  
はし鷹のしら尾をつくと云事

せいらひ君の御鷹のくしのおをきり  
てく、井のきみしらすにてつく是は

きさらきのころの事也君御らんして(一二ウ)  
せいらひはきよくなき事をつかまつり

たるとて嶋へなかさせらるへしとの  
せんし也せいらひ申様たとへ玉の鷹

なりともにてはきよくあるへからすたか  
と申は春になればふるすをこひてかな

らすきたへかへるなりしら尾をつけは鷹」(一二才)  
身くちりをするときわか身をかへり見て

わか身にはいま雪のふりたるよと心  
えてふるすをこひぬ也と申ければ

さてはと思食せいらひなかさる、事を  
やめ給ひぬときこえけりせいらひか哥に

二月のしらおにのこる雪見れは」(一二ウ)  
こ、ろまかせに君ゆるし給ふ

御かとの御哥  
はし鷹のおのへの雪にまた残り

はな／＼鳥にはやきあらしは  
さるあひた鷹をまかた國にてはそのな

をくちと云はくさい國にてはみたらお」(一三才)  
と云唐土にてははな／＼鳥と云わか

てうにて鷹と云なり



一 はし鷹のとつく時は二月ひかん中日にちうぢち

とつく大せうとつかんとする時はとひく

らへてまけたるせうをはゑちきとするかち

たるをはつまとさため哥（二三ウ）

たかねよりふもとの里にとひくたりさと

つまこゝろみん羽くらへのたか

一 大鷹は毘沙門のけんし給へは鞭はほうはひしやもん

うなり大緒は御手の糸也て

一 せう鷹は不動のけんし給ふによつて

むちはりけん也大緒はさつくのなはなり真しん（二四オ）

言にとる時はむちはさんちやう也ゑかふ事はことば

しやすひのみつ也されは三ちやうに寸しやく

さたまらぬによつて鷹のむちの寸さら

になし

一 へうをきなはの心得の事

しうをや其外のあひたのきるゝ事を（二四ウ）

つなくなはなり

一 鷹をつかふにかうさくをそんさす事

有へからすそれをいかにと云に前にあら

はすことく四仏鷹とけんし給ふ事しふつ

も衆生をたすけんためのほんせつなれしゆしやう

は第一には彼せつをふみやうににたるへし（二五オ）

一 ゆかけの大事五の心えの事

一 ゆかけをさす事は手のいたみをよけ

へきため也

一 鷹は仏にてましませはちをよけへほとけ

きためなり

一 たかは四仏にましませはきう中又手（二五ウ）

に取物其外の不浄をよけんかためなりふじやう

一 かう家のをそれしんしやくをへたつる也

然間たかひにすこふしをは斟酌する物也しんしやく

一 かんねつをよけへきためなり

一 鞭に三の心えの事むち

一 うちにて毛羽をなをせはきとうになり（二六オ）けは

なり是不動のりけんなるゆへなり（ママ）

一 うちにてあくまできあきふさかり

を払なりはらふ

一 ふちはもろくの鷹のくすりなるあひた

むち水をかふへきためなり

一 せこ杖かりつゑいぬかひ杖のいはれは（二六ウ）つえ

毘沙門のほうはうなれはひんをはよけ福はふく

來れるはう也又ほうはうなれは成仏とくきたちやうふつ

たうの杖となるなりつへ

一 鷹をはしたかと云事

一条のぬんの御とき鷹をこのませ給ひて

つかはせ給ふとき三条のいんの御時無常のむしやう（二七オ）

かせにさそはれ給ひて彼鷹をはなし

たまふ此鷹よそへもゆかすして内裏の

しらすのきりのきのもとに羽をやす

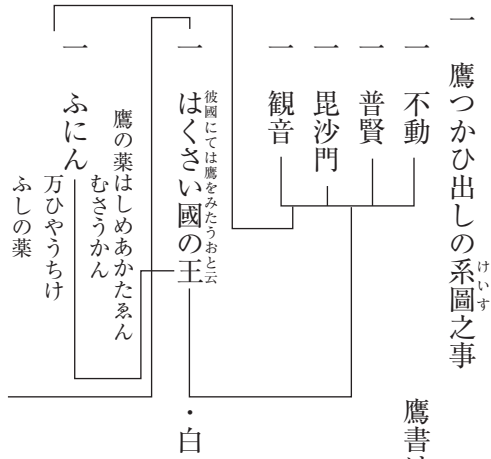
め三条院の御事を思ひ入たるふせいにていん

ありしか三てうのぬんの御はかところにした

をくゐきりしぬる也きさき哀に思食（二七ウ）

此鷹うかふ事もやあるらんとうらなひ申  
せとありしかははかせうらなひ申様彼白  
すのきりの木を切り河にはしにかけさせ  
られ本のふときところは琴のかうに  
させられければ彼はしの二またなるか  
ともすりにすれきひくとなる鷹の」(二八オ)  
こゑにたかはすさては鷹のれい魂入たる  
と思食それより此かたはし鷹と云へり  
琴のかうに桐の木をする事も此御代  
よりはしまれり彼琴の音も鷹の  
こゑにまかはす哥に  
琴の音も聞やまかはぬ橋鷹の」(二八ウ)  
とかへり山やもみちしぬらん  
はし鷹のいはれはほんせつ也可秘云」(二九オ)

(半葉分白紙)



鷹書は彼四仏の御作なり

是鷹のほんち又鷹の

しにもなり給ふ也普賢

観音はすはのほん事也」(二〇オ)

・白

資料紹介 諏訪・大宮流の鷹書

一 まかた國の王  
・黒 天光二年二月二日にはくさい  
よりまかた國へ鷹渡也」(二〇ウ)

一 たひ國の王  
・黒 さうやう元年八月三日に  
まかた國より大唐へ鷹  
わたる也

一 あし原國の王  
・白 大唐より我朝へ鷹渡事仁徳天王の八十七年  
をたち給ふ四十六年と云  
時の正月三日に渡也

一 太國の住人兼光  
・黒 我朝にて鷹と云ふより鷹をくにおうくと喚也鷹とよふ心也  
鷹と云字おうのこゑたる故也  
これより又一流あり

大唐より鷹と彼書を相添て我かてうへ」(二二オ)

わたさるれ共彼書をよみひらく人

もなし其比大王鷹かいかねみつと云ものを

日本へわたし給ふ彼かねみつを相留政頼卿

むこになり十八の秘事卅六の口傳かり

しやうそくをゆるさるゝ也そのほか才覚

の巻に細にするす也」(二二ウ)

「よねみつ」・黄 かねみつかむすめ政頼か家主也

「これより又一流あり此流何れにも

しやうそくはなやかにする也

一 當國住人政頼卿

・黒 此已後弟子数百人不及誌

也」(二二オ)

天正十二年甲午六月吉日廣田伊賀守藤原朝臣宗綱(花押)

同甚木郎殿」(二二ウ)

五七

## 〔付記〕

本稿は、科学研究費補助金（基盤研究C、課題番号20520189、研究代表者 中本大）による研究成果の一部である。

（本学文学部非常勤講師）